

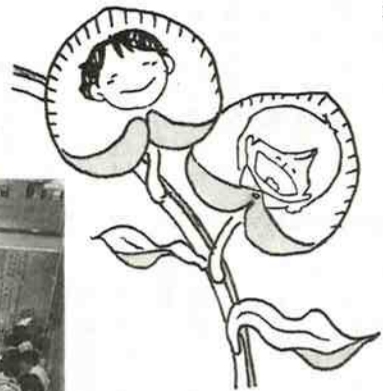
神樹の会会報

No. 31
平成 5 年 12 月 20 日

発行所：神樹の会
発行人：水野 整一

本部事務所（六甲作業所内）
〒657 神戸市灘区備後町3丁目2番22号 ☎821-1533
六甲作業所、東部デイサービス
〒657 神戸市灘区備後町3丁目2番22号 ☎821-1533
明芳デイサービス
〒654 神戸市須磨区大田町6丁目4-4 ☎735-8835
垂水作業所
〒655 神戸市垂水区星陵台4丁目4番45号 ☎782-9675
福祉の店“いたやど”
〒654 神戸市須磨区大黒町2丁目2-12 ☎733-2477

ささえあう



仲間の手と心

第二十二回神樹の会バザーが十月二十七日、二十八日の両日、さんちかホールで盛大に行われました。この収益により、神樹の会の各事業ももっと充実されたものと進めることができ、又、療護施設建設への見直しも少しずつ進んでまいりました。これも大勢の皆様のご支援とご援助のおかげでありますことを覚え心より感謝申し上げます。



▲ 盛況なバザー会場の様子



療護施設建設に向けて

療護施設建設は本会が長年温めてきたことであり、又、会員の熱望でもあるが、ようやくその実現に向けて明るい見通しが見えてきた。本年総会で会員の総意を得ていることはもちろんであるが、これからは民生局のご援助のもと神戸市重度障害児者父母の会の代表の方々と話し合いながら進めていこうということになった。資金は昭和五十七年度より毎年バザーの売上の中より積み立てられている金額が当てられることになっている。

第2回

ゆうすい希望展

ギャラリーミウラさんの特別にご好意で1993年12月21日から26日まで第2回目のゆうすい展が開かれる。今年の出品者は30名、1園、2賛助出品で絵画、書、写真、あみもの、手芸、作曲、作詞等多方面にわたっている。「平素から出品者の一人ひとりが残存機能を精いっぱい働かせて創作してきました。独自の創作意欲を汲み取ってやって頂きたい。」(牧野一夫名誉会長の言葉)



紅型染

― 垂水養護学校 ―
初めての試み
高三沖繩修学旅行

いっぱい咲いていて心優しい人ばかりでした。僕ははじめて飛行機に乗り、窓側に座ったので景色が美しくなりました。首里城は龍三十六匹、王様の椅子などがあり庭も広くてきれいな門もありました。階段が急でリフトで降りました。ひめゆりパークではサポテンが並んでいる間をチューチューとラインで通りおもしろかったです。ここで食べたサポテンのアイスクリームは、お茶の味みたいで最高だったなあ。ひめゆりの塔では皆に協力してもらった千羽鶴とお花を捧げました。琉球の館で紅染を製作し、いい作品ができました。最後の夜は琉球舞があり楽しかった。その後のカラオケ大会は盛り上がりました。今回の旅は



この少ないクラスメイトの一人ひとりの素顔と個性を再発見することができました。(皆の感想をまとめてみました。)

この少ないクラスメイトの一人ひとりの素顔と個性を再発見することができました。(皆の感想をまとめてみました。)

(友生小五 父親)

(友生小五 父親)

新年会のご案内

ふるって参加を

日時 1月23日
13時30分～16時30分

場所 天神閣 (元町駅南)



▲ 父親も参加して楽しかったで～す



ホットなニュースです

歌手の美城旭さんがバザーに協力されて以来七年目になる。毎年美城さんが指導・出演されている場で募金の協力を訴え、集められた募金を垂水作業所へ持参され、垂水作業所所員たちや星陵園生等がロビーでミニコンサートをして迎えている。これがご縁となり垂水作業所所員藤長秀生さんが、十二月十七日午前八時三十分～九時三十分にはサントレの朝カラ「気ままにいい曲」に出演し得意の歌を披露されました。

― 友生養護学校 ―
歌謡の心れあいを求めて

大森 将吉

「社会への啓蒙は家庭の中から」をテーマとしたPTA主催の日曜参観が十二月五日本校で行われた。養訓的授業と集団活動の二部構成で、父親を中心に家族の者とふれあう子ども達のかわいい笑顔と笑い声が教室中に広がり、有意義な時をもつことができて大変よかったと思う。今後もこのような活動が続けられる事を望みます。

(友生小五 父親)

「自立に向けて」とか「自立をめざし」等がよく言われるが、障害のある方々やその両親はこの内容をどのように理解、実践しているのかを探るために、編集委員会では各事業所や友生・垂水両養護学校で意見を聞いてまとめられたものを掲載した。また神戸市民生局大下知則育成課長様と友生養護学校の中尾繁樹先生から助言を頂いた。



できる？
できない？
親はなれ

Independence

障害者にとっての自立とは？

* 気持ちの持ちようで自立につながると思う。何事にもトライすること、精

「自ら大地に立つ」

神戸市民生局育成課長 大下 知則

「ノーマライゼーション」という言葉を耳にしてからもうかなりの年月が経ちました。「障害者と共に生きる」ということも実はノーマライゼーションの実現を言っているのです。

目ざす社会は、ハード面でバリアフリーの状態になり、障害者が自由に歩ける街の実現だけではなく、人の心の段差をなくすることが伴わなければなりません。障害者が地域で生活すると言っただけでなく、人の輪の中に「あるがまま」の状態を受け入れられ、お互いがその存在を認めあうことがなければなりません。そのためにもまず人の力に頼ることなく、障害者自らがそのもてる能力を充分発揮し、自らできる部分では充分汗をかき、主張する姿勢が必要です。

「施し」と「施され」の関係でなく、お互いが生きる姿へ共鳴・共感し、力を出し合い、「共に生きる」「共働」の実現こそ真の自立だと思います。

* 親からはなれて、少しでも寮生活がしたいと思えます。

* ワープロを使っていろいろ挑戦してみたい。いろんな勉強して就職して一人生活できるよう頑張りたい。

* どんなことでも一歩ずつ前進したい。早く発音がなくなつて心配をかけないようにしたいです。

* 何でも自分でできるように頑張りたい。今、油絵を習っています。

* 元気に通園しみんなと話をしたり勉強をすることが自立につながると思う。少しの時間ですが留守番が出来るようになりたい。

* 何でも自分でしたいのに親がだめという。ひたすら訓練、訓練。

* 自立はADLと経済自立だが、大切なのは自分の言葉や行動に責任をもつことだと思ふ。

* 完全自立は不可能だが、食べること、排泄などが出来るようにさせたい。

* トイレの合図、衣服の着脱ができるようになればよいと思ふ。

* 誰にでも介助してもらえようになりたい。どの場にもなじめればよいと思ふ。

* 言っていることが相手に伝わりコミュニケーションがとれればよいと思ふ。

* 子供に自信をつけることだと思ふ。

感謝！

平成五年八月から十一月までに次の方々より尊いご寄付を頂きました。感謝してご報告致します。

庄司 幸子様 堀之内節子様
加藤 雄三様

* 親離れ、子離れができたとき。同年代の人と遊べるようになってほしいです。

* 環境に対応できるようになればよい。少しでも収入を得て社会の中で生活できるように生活訓練に頑張りたい。

* 全介助の必要な重度の子供が生活範囲の自立は自分で呼吸し排便することや介助者へ協力できること、例えばパンツの着脱のときお尻を動かせるようになることではないかと思ふ。

卒業生の親にとって？

* 障害が重いので自立のことは考えられない。

* 補助具を揃えてあげれば、少しでも自立を助けることができると思ふ。

* 日常訓練や社会経験を通して見聞を広めることにより判断力を養いたい。

* 親の考えで、又都合で子供を扱うように思う。卒業すると親は孤立するため子どもにも影響すると思ふ。

* 障害者の自立は親離れ子離れから始まると思ふ。

中川 謙一

先日、散歩がてら買物をすることにし、家族でポトアイルランドの中のワールド記念館に行きました。買物を済ませ出口から出ると十段程の階段があり、夫婦で車椅子を持って上がりました。途中、男性従業員と目が合いましたが、手助けをしてくれませんでした。一瞬「なぜ」と思いましたが買物客の手助けで無事上がりました。十米程横へ移動すると、階段の端にスロープがありました。男性従業員が怪訝そ

「少し力を抜いて」

うな眼差しだったのを思い出しました。子供たちを連れていく時、少々困ったことが有っても、手助けを頼まず自分達でなんとかしようとする反面、誰か気付けてくれて手助けしてくれることを期待する、なにか片意地を張った態度でした。それは今までに少なからず腹立たしいことや、口惜しいことが有ったからです。しかし振り返ってみると私たちの思い込みや誤解があったかも知れません。これからもっと困ることが起こることでしよう。そんな時、「ちょっと手助けして下さい。」と気軽に声を掛けられるように、自然な態度で世間のかかわりを持ちたいと思ふ。

(垂水養護学校小五・小三父親)

「自立」の意味

中尾 繁樹

「自立」というと「社会に出て一人で生活する。」ことだけがクローズアップされている。しかし、今一度「自立」を考え直してみる必要がある。人は生まれた瞬間から「自立」と直面している。羊水という無重力の状態から一転して重力の中に放り出される。全身で重力を感じ、その中で、手や足や頭を一生懸命動かそうとする。そうしているうちに、手と手が触れ合い、手を認知する。目と手と足がわかり、それらを上手に使って動きへと結びつけていく。やがて一人で座り、立ち、歩けるようになっていく。

まると思いますが、子供が卒業すると、自分が四六時中世話をしなくてはならなくなり又、生活に追われ子離れがなかなかできない。

* 親が長生きして元気なのが子供にとっていいと思ふので無理をしたくない。

* 私も年々歳をとり、いつまで子供と暮らすことができるのか。今は作業所で他のお母さんと力を合わせて助けてもらって頑張っています。

* 規則正しい生活をするにより病気の進行を遅らせていると思ふ。自立というより少しでもわが子が長生きして欲しい。

親が毎日明るくゆったりとするところが子供の精神状態の安定、自立につながると思ふ。

秋の一日旅行

去る十一月二十九日会員(学校在籍以外)を対象として舞鶴・若狭方面へバス旅行に行きました。舞鶴記念館では、終戦後戦地から戦上たちの帰国の様子や当時の有様に、感無量の思いにうたれました。裏日本特有の不安定なお天気ではありましたが、若狭塗を見学したり海の宝庫の味に堪能し、又、バスの車窓から眺める深みゆく秋を心より観賞し、楽しい一日を過ごしました。

つぎの会員の方々が永眠されました。

巻幡 正一様(六甲作業所関係)
中島 悦子様(垂水作業所関係)
加藤 靖典様(垂水作業所関係)

今年も残り少なくなつて参りました。今号は「自立」についてご意見をいただきありがとうございます。皆様、お身体を大切にしてお正月をお迎え下さい。

(辻野 田村 進元 小泉 金沢 日高 西原 宮脇)

あともがき

あともがき

あともがき

あともがき

あともがき

あともがき